

自動車に魅せられた魂 — ポルシェの光と影 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也



フェルディナント・ポルシェ

科学技術文明の象徴である自動車の開発に傑出した才能を発揮したのがフォルクスワーゲン・グループの創業者フェルディナント・ポルシェ(1875-1951)だ。後年の自動車評論家たちは彼を「20世紀最高の自動車設計者」と絶賛した。しかし

その一方でポルシェは独裁者アドルフ・ヒトラーに加担した戦争犯罪者として処罰されたという闇の部分をもつ。世界の頂点と奈落の底を行き来したポルシェの生涯をたどることは現代に生きる技術者そして企業のあるべき姿を探るうえで欠かせない作業だと思われる。

職人氣質の独創的技術開発

ポルシェは当時オーストリア・ハンガリー帝国の支配下にあった北ボヘミアの人口5千人ほどの街で生まれた。父親はブリキ職人で彼も少年の頃から家業を手伝っていた。

だが彼の興味はブリキよりも電気であり、母親の理解をえて屋根裏部屋で秘かに実験をつづけて

いた。当初はポルシェの勝手な行動を押さえつけようとしていた父親も彼が独力で電源設備をつくり、街ではじめて自宅に電灯を点した姿を見て非凡な才能を認めるようになった。

18歳になったポルシェは1894年、首都ウィーンに出て電気機器メーカーで働きながらウィーン工科大学の聴講生として物理学、電気工学、機械工学などを熱心に学んだ。のちにポルシェは自動車工学による功績で同大から名誉博士号を贈られ、叩き上げのエンジニアでありながら博士の敬称で呼ばれるようになる。

23歳のとき馬車・自動車製造業者のヤーコプ・ローナーに引き抜かれたポルシェは1900年のパリ万博にハブモーター式の電気自動車ローナー・ポルシェを出展し、グランプリを獲得。2年後にはガソリンエンジンで発電してモーターを動かす世界初のハイブリッドカー・ミクステを開発し、みずから運転してレースで優勝した。

1906年、30歳になったポルシェはより大きな活躍の場を求めてアウストロ・ダイムラーに主任設計者として移籍。友人のサッシャ伯爵の資金援助を受けて開発した小型スポーツカーのサッシャは次々とレースを制覇し、ポルシェの名を全ヨーロッパに轟かせた。各種の航空エンジンも開発したポルシェは41歳で総支配人に就任したものの、レース事故をめぐる会社側の無責任な対応に憤慨して辞表を提出する。

1923年、45歳のポルシェはドイツのダイムラ

ー社に技師長兼取締役として転職。同社が3年後にベンツと合併し、ダイムラー・ベンツとなつてからはメルセデス・ベンツブランドで高性能の乗用車やレーシングカーの設計を数多く手がけた。しかしここでも小型大衆車の開発を経営陣に反対され、1928年に辞職する。

その後、オーストリアのシュタイア社を経て54歳になったポルシェは1931年、ドイツのシュトゥットガルトで設計・コンサルティングの事務所を設立。研究開発のために転職を繰り返し、栄光への階段を昇ってきた職人氣質のポルシェはさらに劇的な季節を迎えようとしていた。

ヒトラーに加担した罪と罰

ヒトラーがドイツの首相に就任した翌年の1933年、ポルシェは首相官邸に招かれて小型大衆車フォルクスワーゲン＝国民車の設計を依頼される。ようやく長年の悲願を実現する機会を手にしたポルシェは1936年にビートルの愛称で世界的に知られるようになる試作車を完成、1938年から計画どおり量産化に乗り出した。

しかし翌年に第2次世界大戦が勃発すると構想は頓挫し、ヒトラーの意向でフォルクスワーゲンの機能を転用した軍用車両キューベルワーゲンやティーガー戦車などの設計に携わる。ヒトラーとの親密な関係で潤沢な資材を与えられ、軍事兵器の開発を進めたポルシェはドイツ敗戦後の1945年、戦争犯罪に問われ、フランスによって逮捕された。すでに70歳になっていたポルシェは同国中部の都市ディジョンの刑務所に収監され、会社をはじめとする財産も没収された。

収監から約2年後の1947年、ポルシェは息子のフェリーが用立てた100万フランと引き換えに釈放される。その2年後にようやくドイツ国内を旅行することが許され、彼は創業の地であるシュトゥットガルトへ向かった。戦後すぐに本格的な生産を開始したフォルクスワーゲンでアウトバーンを走っていると何度も別のフォルクスワーゲンとすれ違った。遠い青春の日々からずっと想い描いてきた光景だった。彼の眼からあふれるように涙がこぼれ落ちた。

1950年、75歳になったポルシェの誕生会にはヨーロッパ各地からポルシェ356が続々と駆けつけてきた。ポルシェ356は彼が囚われているときにフェリーやポルシェ社のスタッフが開発した高性能スポーツカーで何度もレースで優勝していた。ポルシェは集まったドライバーたちと握手を交わし、わが子を慈しむように車体を撫でたという。至福のときは終わり、ポルシェは同年の冬に脳卒中で倒れ、翌年1月に永遠に帰らぬ人となった。

美しい夢の最後の砦

自動車を設計＝開発するうえでポルシェは3つの夢を抱いていた。第1は大衆のための経済的な小型車をつくること、第2は最先端のスポーツカーをつくること、第3は農民のための効率の高いトラクターをつくることだった。

このうち第1と第2の夢はフォルクスワーゲンとポルシェ356として実を結んだ。しかしその反面、ポルシェがヒトラーと手を組んで凶暴な殺戮兵器をつくったことも紛れもない事実だ。美しい夢はなぜ歪められてしまったのか。

ポルシェは政治に無関心で無垢な技術的好奇心がヒトラーに利用されたという見方もある。だがポルシェほどの人物が技術の政治的利用に鈍感であったとはとても考えられない。

ヒトラーのフォルクスワーゲン構想に共感したポルシェは戦時体制下でフォルクスワーゲンの軍事的利用に率先して協力した。それが殺戮兵器としてどういう悲惨な結果をもたらすのか熟知していたはずだ。なぜなら使用後の効果をあらかじめ想定せずに優秀な製品を設計＝開発することは不可能だからだ。優秀な製品とはより効果的に敵と見做す者を殺傷できる兵器にはかならない。

少なくともこの時点でポルシェは政治的無関心を装いながら悪魔に魂を売り渡していた。だからといってポルシェの暴走を決してあざ笑うことはできない。

悪魔の巧妙なささやきに惑わされてしまう弱さは誰にでもある。最後の砦となるのは人々に飲ばれる美しい夢を守り抜くという信念だ。経営的にはそれを創業の精神あるいは企業の社会的責任と呼んでもいいだろう。